



新しい音楽科の評価の在り方

教育芸術社

新しい音楽科の評価の在り方

元鳥取大学教授 川池 聡

1 これからの評価は学習指導要領をめやすに進める

学校教育における評価については、その基本的な考え方が、平成12年12月に教育課程審議会の答申として社会に示された。

学校教育における評価は、学習指導要領が示す目標に照らして、その実現の状況を見る評価を基本とすること。

このことは、学習指導要領の目標及び内容を評価の基盤と考え、その実現の状況を評価するという、いわゆる絶対評価を基本とするということである。

この絶対評価といわれている評価の方法は、今まで学校の教育現場で長年なじんできた相対評価と違い、評価する場合に規準に照らして評価をする方法である。相対評価では、集団中の子どもたちをその集団の中で比較して評価を行ってきた。

これからの学校教育における評価は絶対評価を基本として実施することになるが、このことは、年間指導計画、題材指導計画作成の段階から学習指導要領の目標及び内容に応じた指導内容を明確にし、示された評価規準を参考にしながら評価計画を作成し評価を進めることである。

2 絶対評価は学習指導要領に即した評価規準により進める

答申では、このような変更にともない、それぞれの学校での評価が適切に実施されるように、児童生徒の学習の状況を客観的に評価するための評価規準、評価方法等を開発することが述べられている。それにしたがって、国立教育政策研究所において開発を進め、平成14年2月に、「評価規準、評価方法等の研究開発（報告）」ということで評価規準、評価方法等が社会に公表された。それぞれの学校では、この評価規準や評価方法を参考にしながら、学校の教育課程にしたがった音楽科の指導計画を作成する中で、それぞれの題材に応じた評価規準を設定し、平成14年度からは絶対評価を全面的に進めることになる。

3 学校における評価は観点別学習状況の評価をベースにして進める

観点別学習状況の評価については、「音楽への関心・意欲・態度」「音楽的な感受や表現の工夫」「表現の技能」「鑑賞の能力」の四つの観点が示され、既に現行学習指導要領のもとで実施され、それぞれの学校では10年間の実績がある。（図1）

評価の観点及びその趣旨（要約）

ア 関心・意欲・態度 音楽に親しみ、音楽を進んで表現し、鑑賞しようとする。

イ 感受や表現の工夫 音楽のよさや美しさを感じ取り、創意工夫し、生かしている。

ウ 表現の技能 表現する基礎的な技能を身に付けている。

エ 鑑賞の能力 楽しく聴取、鑑賞し、よさや美しさを味わう。

（図1）

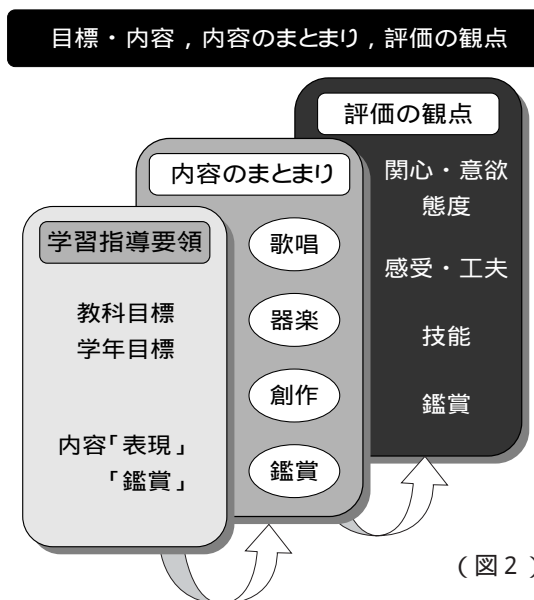
また、学習指導要領の目標に照らして評価することも既に示されていた。しかしながら、評価規準を設定したり、評価方法が明確に示されていないこともあり、学習指導要領の目標に照らして評価する（いわゆる絶対評価）という評価方法が一般化した方法として定着しなかった。

そこで今回の報告により、評価規準と評価方法が具体的に示され、学習指導要領の目標に照らした評価がそれぞれの学校で確実に進められるようになった。

4 評価規準は四つの活動分野の内容のまとめりに示された

今回の報告では、活動分野である「歌唱」「器楽」「創作」「鑑賞」について、「内容のまとめりごとの評価規準及びその具体例」が示された。このような示され方がされた背景には、音楽科の目標は、表現と鑑賞の音楽活動を通して実現されるという教科目標が存在しているからである。

このことは、音楽科の目標やそれを実現するための内容は、表現の活動である「歌唱」「器楽」「創作」と「鑑賞」の活動を通して実現するということである。学習指導要領に示された教科目標や学年目標、表現と鑑賞の内容は、それぞれの学校が作成する音楽科の指導計画によって進められる授業によって実現されるが、その場合の評価は、活動を中心とした「内容のまとめり」ごとの評価規準によって進めるということである。（図2）



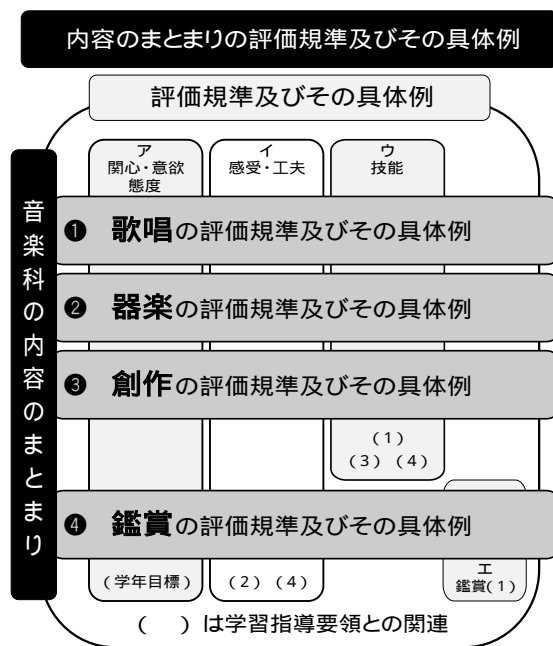
（図2）

5 学習指導要領の目標及び内容と内容のまとめりごとの評価規準は縦横の関係である

評価の観点は、「音楽への関心・意欲・態度」「音楽的な感受や表現の工夫」「表現の技能」「鑑賞の能力」の四つの観点で示されているが、内容のまとめりごとの評価規準は、「歌唱」「器楽」「創作」については、「音楽への関心・意欲・態度」「音楽的な感受や表現の工夫」「表現の技能」の3観点を、「鑑賞」については「音楽への関心・意欲・態度」「音楽的な感受や表現の工夫」「鑑賞の能力」の3観点を示されている。

これらの関係を表にしたものがP.4の（表1）である。

評価は4観点で行うが、そこにいたる学習活動は、「歌唱」「器楽」「創作」「鑑賞」の内容のまとめりを通して見ていこうとするものである。学習指導要領にも内容という言葉があり、評価規準でも内容のまとめりという言葉があるので、ともすると混同しがちなこともある。これらは密接に関連しているが、学習指導要領の内容はまさに内容そのものをいっているのに対して、評価規準の内容のまとめりは活動分野を示しているので音楽活動と密接に関連しているといえる。これらのことを図にまとめると（図3）のようになる。



（図3）

(表1) 評価の観点と内容のまとまりとの関係

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
歌唱				
器楽				
創作				
鑑賞				

網掛けの部分は、内容のまとまりの評価規準及び具体例が示されている。

6 観点別の評価は指導計画と密接に関連して進められる

絶対評価で評価を進めるには、毎時間の授業が何を目標としてどのような活動を展開するかが重要な決め手になる。漫然と歌を歌ったり楽器を演奏したりしては、絶対評価を進めることはできないのである。そのためには、まず、音楽科の指導の根幹となる年間指導計画の中に評価計画が見通されていないとてはならない。

年間指導計画は、多くの場合(表2)のような項目で作成されている。

(表2) 年間指導計画と評価計画との関連

月	題材名	題材の目標	学習内容		教材選択	評価関連			
			表現	鑑賞		歌唱	器楽	創作	鑑賞
4月									
5月									

右側の網掛けの部分が評価関連の部分である。

印は主な評価活動を示し、印は関連した評価活動を示している。この計画から明らかになることは、4月の題材では、歌唱を中心にした指導が行われ、評価関連の「歌唱」に印があることは、歌唱の内容のまとまりの評価規準を中心に評価が行われることを示している。また、「鑑賞」に印があることで、歌唱と関連した鑑賞の評価活動が行われることを示している。このことは、表現と鑑賞の関連を図った指導が行われることを示していることでもある。

また、5月の題材では、器楽を中心にした指導が行われ、評価関連の「器楽」に印があることは、器楽の内容のまとまりの評価規準を中心に評価が行われることを示している。また、「創作」と「鑑賞」に印があることで、それらが器楽と関連した評価活動が行われることを示している。

7 題材の指導計画で内容のまとまりごとの評価規準による評価の姿が見えてくる

題材の指導計画は、題材の目標を実現するために、多くの場合、1次、2次というようなねらいを中心にした活動のまとまりの積み上げで構成されている。題材の目標とともに重要なのが「題材の評価規準」と「学習活動における具体の評価規準」である。

「題材の評価規準」は、題材の目標を実現する活動を予想し、歌唱、器楽、創作、鑑賞の「内容のまとまりごとの評価規準」や「評価規準の具体例」を参考にして導き出すことが大切である。このことが、絶対評価を進めるための最初のステップになる。また、「学習活動における具体の評価規準」は、「題材の評価規準」に示された観点を、それぞれの学校でさらに具体的な音楽活動に置き換えて記述するものである。これらは(表3)のような形で記述される。

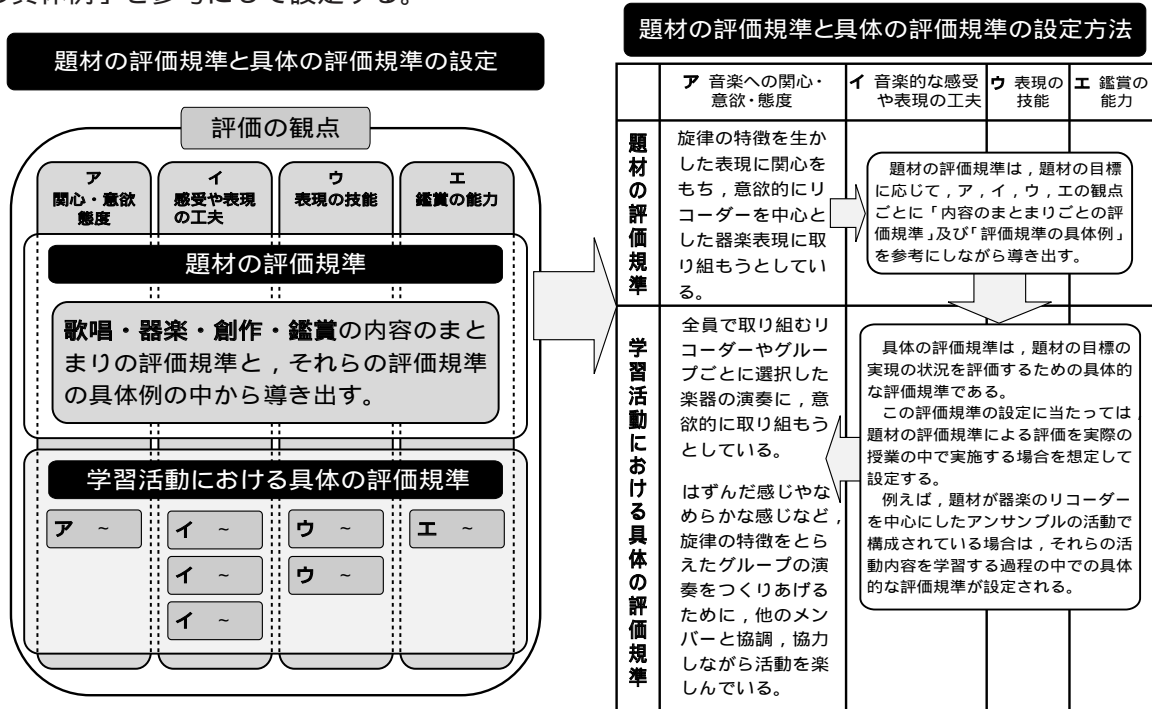
(表3) 題材の評価規準及び学習活動における具体的評価規準 「評価規準，評価方法等の研究開発(報告)」より

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	旋律の特徴を生かした表現に関心をもち、意欲的にリコーダーを中心とした器楽表現に取り組もうとしている。	はずんだ感じとなめらかな感じといった旋律の特徴に気付くとともに、フレーズのまとまり、強弱や速度の変化などを自分なりに感じ取って、表現や鑑賞の仕方を工夫している。	はずんだ感じとなめらかな感じといった旋律の特徴など、音楽を特徴付ける様々な要素を自分なりに生かすように楽器を演奏している。	主な旋律の特徴や楽器の美しい音色を聴き取るとともに、リコーダーの音色や旋律の特徴を生かすための互いの表現の工夫を感じ取って聴く。
学習活動における具体的評価規準	①全員で取り組むリコーダーやグループごとに選択した楽器の演奏に、意欲的に取り組もうとしている。 ②はずんだ感じやなめらかな感じなど、旋律の特徴をとらえたグループの演奏をつくりあげるために、他のメンバーと協調、協力しながら活動を楽しんでいる。	①はずんだ感じやなめらかな感じなど、旋律の特徴の違いを感じ取るために、聴き方を工夫している。 ②はずんだ感じやなめらかな感じで演奏するなど、旋律の特徴やその変化を生かしたリコーダーの演奏を工夫している。 ③自分たちのイメージした「船長さん」に合った音楽を工夫するために、みんなとそろえてグループ全体の工夫を表現している。	①楽譜を見ながら、みんなとそろえて主旋律をリコーダーで演奏している。 ②美しい音色に気を付けて、主旋律をリコーダーで演奏している。 ③はずんだ感じとなめらかな感じの旋律の特徴を生かすように、楽器を選択したり、演奏をしたりしている。	①はずんだ感じとなめらかな感じといった旋律の特徴の違いやその変化を感じ取って聴く。 ②友達がつくりあげた音楽表現のよさや美しさを感じ取って聴く。

上の表の「学習活動における具体的評価規準」の観点ア、イ、ウ、エは、それぞれア、イ、ウ、エという評価規準となり、学習の展開の中で具体的に評価が行われる。したがってこの題材では、アで2観点、イで3観点、ウで3観点、エで2観定の合計10観定の評価が行われることになる。題材の指導時間を7時間とすれば、1時間当たりの評価項目は1～2項目程度であろう。

8 絶対評価の要は「題材の評価規準」及び「具体的評価規準」の設定にある

「題材の評価規準」は、題材の目標に応じて、「内容のまとまりごとの評価規準」及び「評価規準の具体例」を参考にして設定する。



この一連の作業がいわゆる絶対評価を進める要となる。言い方を変えればこの作業をそれぞれの学校がすることにより、学習指導要領の目標に照らした評価が行われたことになるのである。資料を参考にして題材の評価規準を設定する過程は次の表(P.6)のようになる。下線を引いた部分が「題材の評価規準」を導き出すために参考にした部分である。

題材の評価規準を導き出すために参考とした 内容のまとめりごとの評価規準とその具体例

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
歌唱				
器楽				
創作				
鑑賞				
内容のまとめりごとの評価規準	<p>【器楽】進んで器楽表現にかかわり、器楽活動への意欲を高めるとともに、その経験を生活に生かそうとする。</p>	<p>【器楽】旋律楽器及び打楽器の演奏、簡単な重奏や合奏などによる器楽表現及び楽器の音色のよさや美しさを感じ取るとともに、拍の流れやフレーズ、強弱や速度の変化、音の組合せの特徴などを感じ取り、それらを生かした器楽表現の仕方を工夫したり、身体表現をしたりしている。</p> <p>【創作】様々なリズムや旋律及び音の組合せのおもしろさ、いろいろな声や音の響きの特徴を感じ取るとともに、音楽表現のイメージを広げ、それらを生かした音楽づくりの仕方を工夫している。</p> <p>【鑑賞】いろいろな種類の音楽やいろいろな演奏形態による音楽を聴いて、音楽を特徴付けている要素の働きに注目したり、</p>	<p>【器楽】範唱や範奏を聴いて楽器を演奏したり、階名で模唱や暗唱をしたりリズム譜に親しんだりしている。また、身近な楽器に親しみ、簡単なリズムや旋律を演奏するとともに、互いに楽器の音や伴奏の響きを聴いて楽器を演奏している。</p>	<p>【鑑賞】主な旋律の反復や変化、副次的な旋律、音楽を特徴付けている要素、楽器の音色及び人の声の特徴、それらの音や声の組合せなどに気を付けて聴きながら、曲想の変化を感じ取って聴く。</p>
評価規準の具体例	<ul style="list-style-type: none"> 個々の楽器の演奏、簡単な合奏や小アンサンブルなどに関心をもち、意欲的に器楽表現に取り組もうとしている。 楽器固有の音色や美しい響きに興味・関心を深めながら、個々の楽器にじっ 	<p>拍の流れやフレーズ、強弱の変化、音の組合せの特徴など、音楽の流れを体全体で受け止め、生き生きと演奏を工夫したり、身体表現をしたりしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> リズム、旋律、強弱、速度、音色、和音などの要素を鋭く感じ取って演奏したり、それらの相互のかかわりをとらえて演奏したり、身体表現をしたりしている。 旋律楽器及び打楽器の適切な扱い方、演奏の仕方など、楽器の基礎 	<ul style="list-style-type: none"> 音楽に合わせて体を動かしながら、楽曲全体の曲想や音楽の流れを感じ取って聴く。 楽曲を特徴付けているリズム、旋律、強弱、速度、音色、和声、調などの要素の働きに気を付けて聴いたり、それらの有機的なかわり合いを感じ取って聴

この表は内容のまとめりの評価規準及びその具体例を活用するための形式を示したサンプルなので、記載したそれぞれの内容の整合性はありません。

9 小学校では、観点別評価はA, B, Cで、評価は3, 2, 1で記録する
 評価や評価の結果は、学習指導要領の目標に照らして下の図のように評価する。

